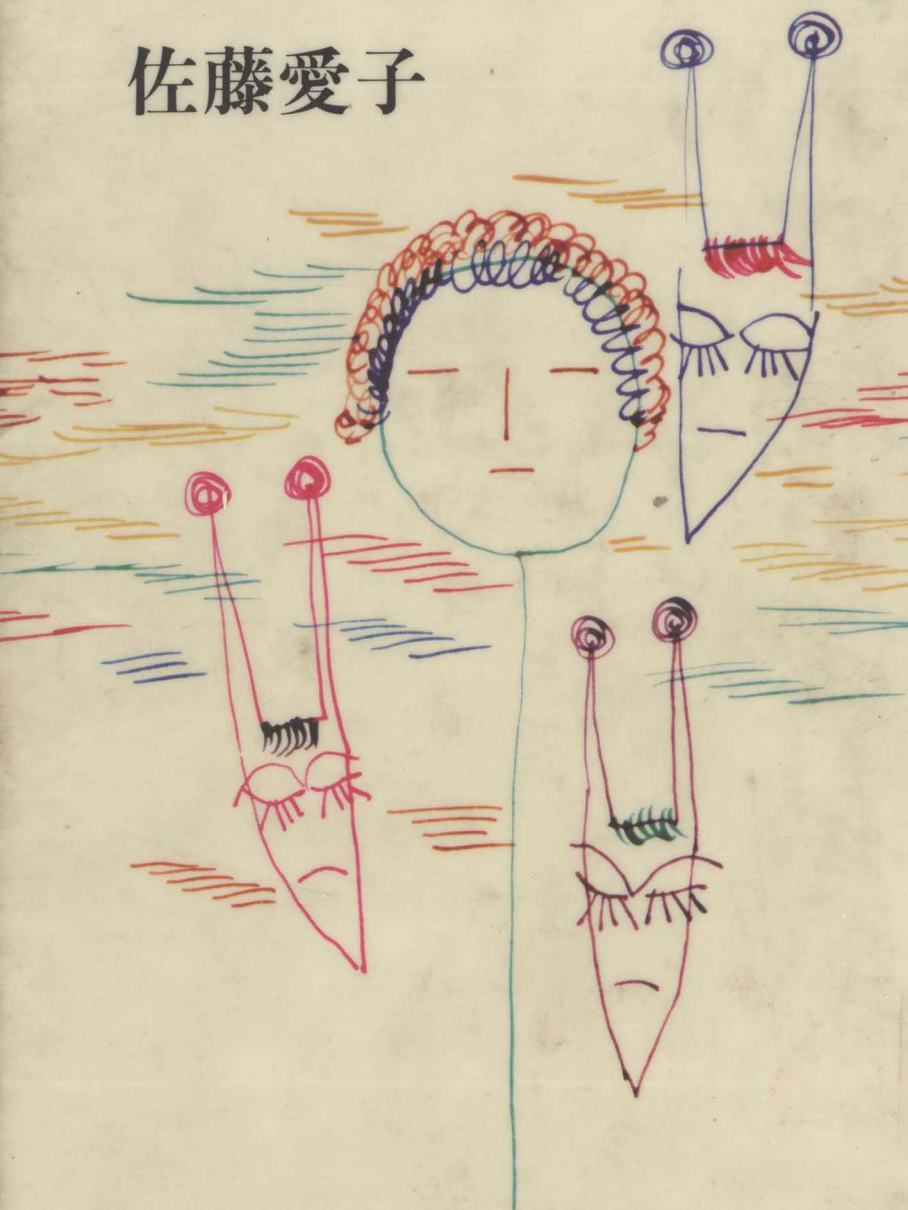


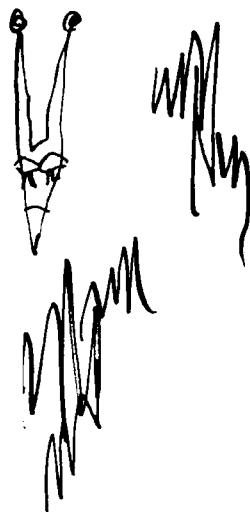
躁病のバイキン

佐藤愛子



躁病のハイキン

佐藤愛子



躁病のバイキン

定価 九八〇円

著者——佐藤愛子

編集人——守屋健郎

発行人——加藤祥二

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一

千一〇〇

大阪市北区野崎町八の一〇

千五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一

千八〇二

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——ナショナル製本

第一刷——昭和五十七年十月十四日

0093-703350-8715

© 1982, Aiko Satō

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

躁病のバイキン

目次

躁病のバイキン

7

樹座公演顛末記

29

自演自作

47

禁じられた遊び

69

バンバンザイの二人

99

幸福の情景

137

多助のタイコ

161

二階のスーちゃん

191

装丁
難波淳郎

躁病のバイキン

躁病のバイキン

子供の頃、病氣の中で何が怖いかというと、まず一番が癩病であった。

それから肺病、チフス、コレラも怖かった。天然痘というアバタの残る怖い病氣もあり、天然痘患者が出たという家の前は、学校の行き帰りにうつらぬよう、息を詰めて走ったものである。

その頃、私の家には三人の女中がいたが、彼女たちはなぜか、「怖い話」をするのが好きであった。今のように週刊誌もテレビもない時代であるから、夜なべ仕事をしながらの話は、お化けの話とか、狐や狸に欺された話とか、怖い目に遭った話のほかには、怖い病氣の話でもしているよりしやうがなかったのであろう。

肺病とチフスならどっちがましか、という話題になり、一人は高熱でハゲ坊主になるチフスよりも肺病の方がマシだといい、もう一人は徳富蘆花の『不如帰』を持ち出して、浪子は肺病ゆえに姑にうとまれた、私の村では肺病と聞くと村中が白い眼で見る、肺病は血を吐くからいやだといい、そして必ずこの歌を歌うのであった。

「武男が戦争^{センソウ}に行くときは

白い 白い まっ白い

ハンカチ ふりふりねえあなた
早く 帰ってちょうだいね

シュッシュ ポッポと出る汽車は

武男と浪子の別れ汽車

ふたたび帰らね汽車の窓

啼いて血を吐く ほととぎす
そうして、

「肺病は怖い、ほんまに怖いわ……」

と結ぶのであった。

そのうちに必ず話題は癩病の話になる。

昔、野口男三郎という男がいた。

その男の愛人が癩病になった。

癩病は不治の病とされているが、人間のお尻の肉を黒ヤキにして飲めば直ると聞いて、兄を殺してそのお尻の肉を切り取って黒ヤキにして飲ませた。

それが発覚して、男三郎は牢屋に繋がれ、そこで歌った。

「あーあ世は夢か

幻か

獄舎にひとり

思い出の

夢より覚めて

見渡せば

あたり静かに

夜はふけて

月影あわく

窓にさす

ああ この月の

さす影は

置く露深き

青山に

静かに眠る

兄君の

……………」

一人が歌いはじめると、他の二人もそれに和し歌は、
蜿蜒えんえんとつづいて、
「この世をしのび 身をしのび

兄君ゆるし　たまいてよ……」

と三人は哀切きわまりないウラ声をはり上げるのであった。

私は毎晩のように女中部屋へ行つてはそんな話や歌を聞いて怯え、怯えるくせにまた行くのである。そして癩病になつて眉毛のなくなった夢を見て泣いたりした。

それらの怖い病気はみな「バイキン」が運んでくるものである。

バイキンは口から入るもの、皮膚から染みこむもの、鼻から入るもの、いろいろある。

「バイキンでない病気はキチガイでっせ」

と物識りの女中がいった。学校へ行く途中にキチガイの奥さんがいる家があったが、それはバイキンによつて罹る病気ではないから、家の前を息を詰めて走る必要はなかった。

ところで、「ノイローゼ」という病気は作家高見順によつて有名になったが、「躁鬱病」という病気は作家北杜夫によつてこのところ急に普遍化されて来たようである。北杜夫がこの病に罹つて何年になるのかよくわからないが、私たちは彼に会うと、

「今は何？　ウツ？　ソウ？」

と訊くのが挨拶代りになつてしまった。躁鬱病とは、憂鬱な時期と朗らかなになる時期とが交互にやってくる病気で、鬱期のときは何をする気力もなく、人とも口を利かずに閉じ籠っているが、いったん躁期に変じると、人間が変わつたように大はしゃぎ、人前で歌は歌う、浪花節は唸る、ものは買いまくる、そして仕事もしまくるという状態になり、鬱期の収入減をこの期に取り戻すという、甚だ合理的な病気である。困ることは鬱期と躁期の中間の、「普通の時」というのがあるのかない

のか、あるとしても極めて短いらしいことで、私は「普通の時」の北さんにあまりお目にかかったことはないのである。いや「普通の時」の北杜夫は極めてもの静かな紳士であるため、私のような粗暴な人間から見ると、鬱状態に見えるのかもしれない。

ところである日——今年の初夏の頃のことだ。遠藤周作から電話がかかってきた。

「おい、お願いがあるんやけどな、聞いてくれるか」

いきなりそういう。

「お願い？ なによ？」

私は警戒しながらいった。遠藤さんから神妙な声で「お願い」などといわれると私は緊張せずにはいられない。

「十一月に神戸で樹座の公演をやるんだがな、それに出演してくれんか？ 頼むよ、出てくれ」

樹座というのは遠藤さんが主宰している素人劇団である。一度だけ樹座の「カルメン」を見物したことがあるが、何ともこれは珍らしいものであった。「熱演必ずしも佳ならず」という感想を人に与えるものであった。遠藤氏はそのとき、エスカミリオに扮して、ダミ声をはり上げて闘牛士の歌を歌った。何だかやたらに女にもてている場面であった。

マントを羽織り、金ピカの上着、白いストッキングがマントの下からヌウと出ているさまは、恰も「西洋富山のマンキンタン」とでもいった格好で、

「うーん、さすが……座長だけあって花があるわ」

と私はいったが、花にも桜の花、菊の花からバナナの花までいろいろあるのである。

遠藤さんはその樹座公演「カルメン」に出演せよというのだ。

「いやよう」

と私は即座にいった。私にとって芝居なんでものはするよりも、観て、好き勝手、いいたい放題をいうところに面白さがあるものだ。何がよくて「好き勝手をいわれる立場、笑われる立場」に立たねばならぬのか。

しかし遠藤さんはしつこい。これが神戸公演でなければ私など誘うわけはないのだが、話を聞くと神戸新聞がこの公演には力を藉かしているという。神戸新聞としては乗り出したからには観客が一人でも増えてほしい。そこで佐藤愛子を出演させてもらいたいという条件を出したのだという。といても、なにも私の「人気」を見抜いたというわけではない。私が神戸の女学校を卒業しているので、同級生の五人や十人は義理に見に来てくれるだろうという、実にカナしい望みを托されたのである。

「そんなことをいわんと、出てくれよ、頼むよ、出てくれ、出て下さい」

と遠藤さんは喰い下る。仕方なく、

「北さんが出たら出てもいいけど」

と私は答えた。

というのはその頃、北杜夫はずーっと鬱病で、そのため樹座の東京公演にも出演を懇望されたにもかかわらず出なかったという噂を聞いていたからである。鬱病であれば彼はいかに頼まれても断ることは間違いない。